

# 教員のほめが子どもの学習意欲に与える影響 —学校種に注目して—

○和田己生（上越教育大学大学院）  
吉澤勝治#（静岡大学教職大学院）

社浦竜太（常葉大学）  
太田正義（常葉大学）

キーワード：ほめ、学習意欲

## 問題と目的

ほめの効果において、小学1年生では、誰にほめられたかという「ほめ手」が学習意欲に影響を与えるが、小学3年生は、どのようにほめられたかという「ほめ方」が学習意欲に影響を与える（青木, 2011）。また、高校生は、ほめに対して懐疑的な態度を示す。これは高校生に限った特徴でなく、中学生から高校生の年代における特徴である（高崎, 2012）。以上のように、小学校、中学校、高等学校の各学校種による児童生徒のほめに対する認知の差があり、学習意欲に影響を与えるほめも学校種によって異なることが考えられる。各発達段階において学習意欲に影響を与えるほめを検討することは、児童生徒を長期的な視点で教育を行なっていく上で、有用な知見になる。

そこで本研究は、小学高学年生、中学生、高校生を対象にし、教員からのほめが学習意欲に与える影響の違いを学校種別に検討することを目的とする。

## 方 法

**調査対象者** X 県の公立学校に在籍する小学5・6年生101名、中学1～3年生165名、高校1～3年生227名の計493名。

**調査時期** 2019年7月～9月

**調査手続き** 担任に帰りの会で配布してもらい、その場で回答を求め回収した。倫理的配慮として、回答者には、任意の回答であること、途中で中断できること、成績には影響しないことを伝えた上で協力を依頼した。

## 調査材料

**教師からのほめられ経験** 日高（2016）が作成したほめられ経験尺度をもとに、管理職と協議の上、15項目を用いた。

**学習意欲** 若松・大谷・小西（2004）が作成した学習意欲尺度を6件法から5件法に修正し用いた。

## 結果と考察

学習意欲（短期的・中長期的）に影響するほめを検討するために、共分散構造分析によるパス解析を行った（Figure1）。その結果、モデルの適合度はおおむね良好であった（GFI=.97, AGFI=.90, CFI=.97, RMSEA=.06）。このモデルについて、学校

種による差異を検討するため、多母集団同時分析を行った（Table 1）。いずれの学校種においても、過程に対するほめから短期的学習意欲に.43～.50、過程に対するほめから中長期的学習意欲に.36～.50と有意な正の係数が確認された。これは、発達段階が大きく影響していると考ええる。ピアジェの発達段階論によると、小学高学年生以降は形式的操作期にあたる年代であり、抽象的な概念や仮説的な状況を取り扱うことができるようになる段階であると述べている。すなわち、小学高学年生以降は教員のほめを認知し操作することが可能になり始める時期である。また、過程に対するほめから中長期的学習意欲へのパスについて、小学生は高校生よりも有意に高い効果が確認された。これは、前述にあるように、中学生の時期から高校生にかけて懐疑的な態度を示し始めることが関係していると考ええる。すなわち、過程に対するほめは小学高学年生、中学生、高校生の学習意欲を喚起するために有効なほめである一方で、高校生になると小学高学年生に比べほめをそのまま受け入れるのではなく、ほめられた事柄や理由等に目を向ける可能性が示唆される。すなわち、ほめに対して肯定的な態度ばかりでなく、時には否定的な態度をとることが推測される。

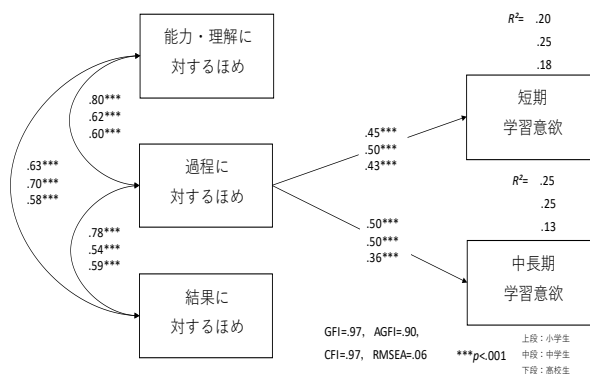


Figure 1 多母集団同時分析の結果

Table 1 パラメーター比較

|                   | 小学生-中学生 | 中学生-高校生 | 小学生-高校生 |
|-------------------|---------|---------|---------|
| 過程に対するほめ-短期的学習意欲  | 1.31    | -0.12   | 1.18    |
| 過程に対するほめ-中長期的学習意欲 | 0.25    | -1.54   | -2.04   |

1.96以上の場合5%水準で有意